

フタスジヒメハムシの発生生態と ダイズの総合的有害生物管理(IPM)のための防除法

古川農業試験場

1 取り上げた理由

ダイズ栽培におけるフタスジヒメハムシによる莢加害は、黒斑粒や腐敗粒の発生を招き、品質低下の要因として問題となっている。ダイズ害虫に対する慣行の防除体系は、ダイズサヤタマバエ、マメシクイガ、カメムシ類を想定した同時防除（普及に移す技術第73号）を基本としているが、フタスジヒメハムシによる被害を抑制するためには、より効率的な防除技術の確立が求められる。そこで、本種の発生生態に応じた防除法を検討した結果、有効な防除体系を構築できたので普及技術とする。

2 普及技術

- 1) フタスジヒメハムシの被害を抑制するためには、播種時の初期防除（普及に移す技術第81号参考資料, 83号普及情報）と子実肥大初期の防除を組み合わせた体系防除が有効である（図1, 2）。
- 2) 子実肥大初期の防除として、第2世代成虫の発生盛期（8月下旬～9月上旬）におけるシペルメトリン乳剤による茎葉散布が有効である（図2）。
- 3) 第2世代成虫の発生盛期と莢の加害時期は、播種時期や品種の早晚による差が小さいことから、子実肥大初期の防除時期はすべての作型、品種で共通する（図3）。

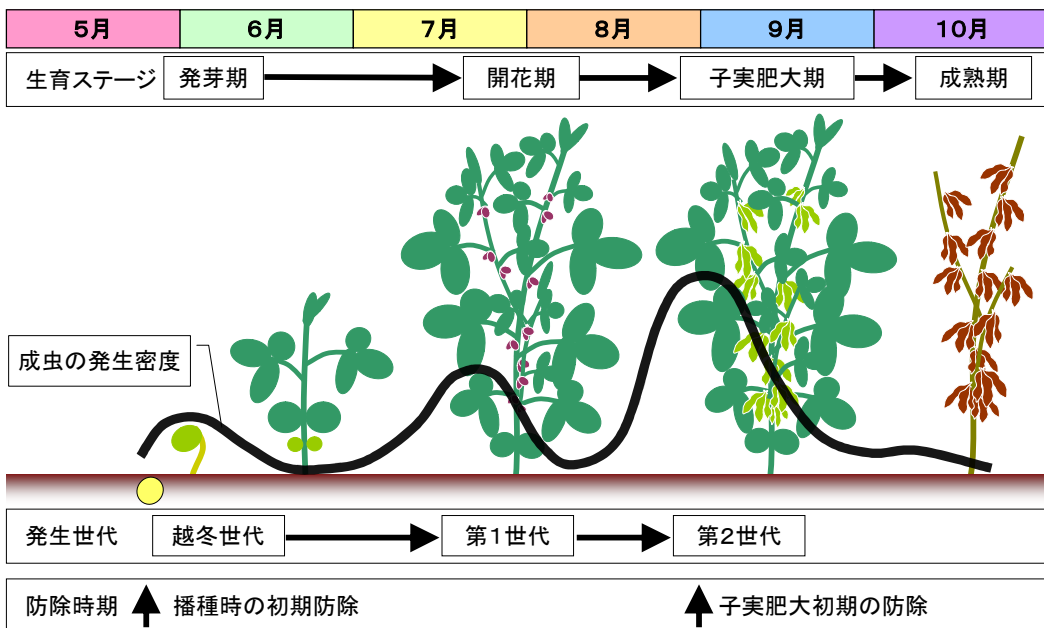


図1 ダイズにおけるフタスジヒメハムシの発生消長の模式図と防除体系

3 利活用の留意点

- 1) 晩播栽培では越冬世代の成虫侵入を回避できるが、第1世代以降の成虫侵入が想定されるため、播種時の初期防除は省略しない。
- 2) 第2世代成虫の発生時期は年次変動が認められる（普及に移す技術第81号参考資料）。子実肥大初期の防除は、時期が遅れると効果が劣るため（図2）、「(4) フタスジヒメハムシの発生調査法」により発生状況を確認して防除時期を決定する。

（問い合わせ先：古川農業試験場作物保護部 電話 0229-26-5108）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

大規模水田輪作におけるダイズの総合的有害生物管理(IPM)のための主要病害虫制御技術の開発(平成16~20年)

2) 参考データ

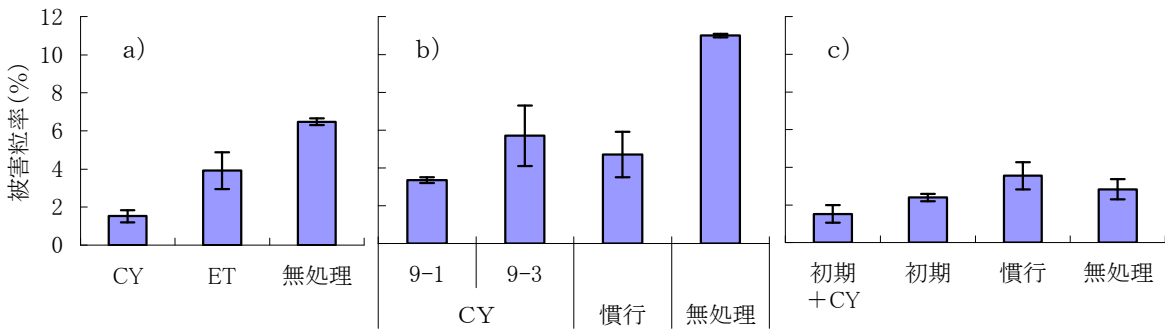


図2 フタスジヒメハムシに対する薬剤防除の効果(平成19-20年)

注1) 各試験区の処理内容は次のとおり。CY:シペルメリン乳剤(2000倍, 200l/10a), ET:エトフェンブロックス乳剤(1000倍, 200l/10a), 初期:チアメトキサム水和剤(6ml/乾燥種子1kg), 慣行:エトフェンブロックス乳剤(1000倍, 200l/10a)+MEP乳剤(1000倍, 200l/10a), 初期以外は子実肥大期の茎葉散布。無処理:殺虫剤無散布。

注2) 子実肥大期防除の薬剤処理月日は次の通り。a)8月30日。b)9-1は9月第1半旬(9月2日), 9-3は9月第3半旬(9月11日), 慣行はエトフェンブロックス乳剤を9月2日, MEP乳剤を9月11日。c)CYは9月1日, 慣行はエトフェンブロックス乳剤を9月1日, MEP乳剤を9月9日。

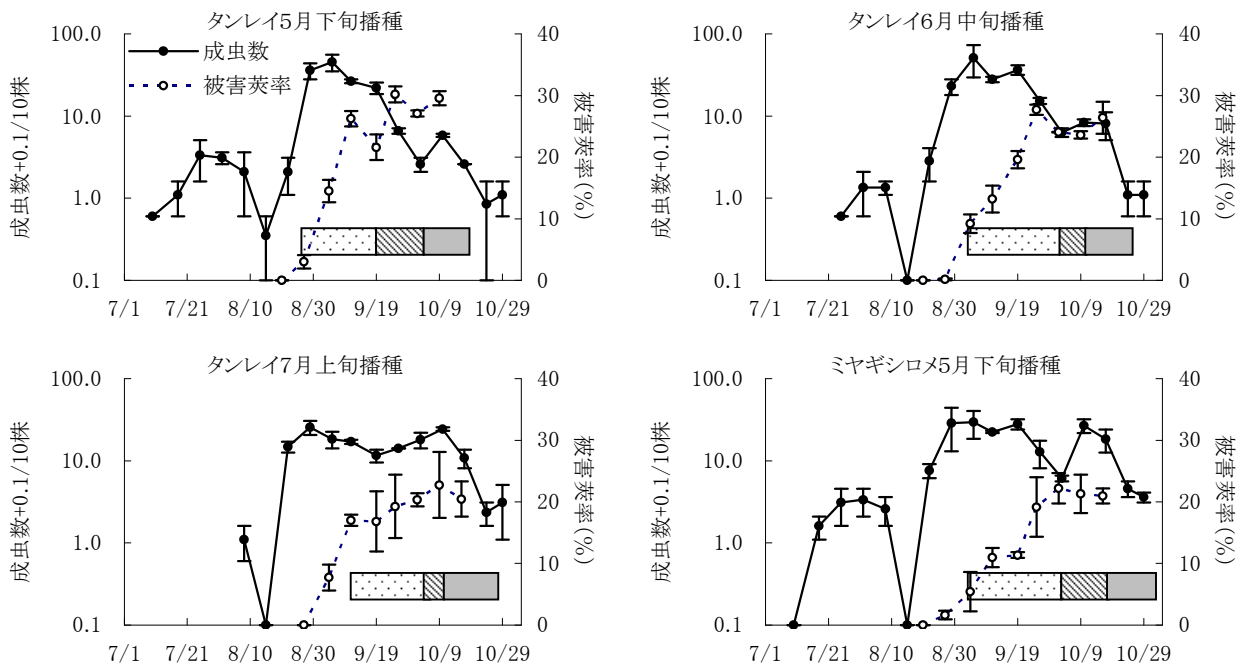


図3 播種時期および品種早晚性が異なる条件下における成虫密度と被害率の推移(平成19年)

注1) 図中 は子実肥大期 は黄葉期~落葉期 は落葉期~成熟期

3) 発表論文等

a 関連する普及に移す技術

ダイズにおけるフタスジヒメハムシの発生活長とエチルチオメトン粒剤による防除(第81号参考資料)

ダイズのフタスジヒメハムシに対するチアメトキサム水和剤(商品名:クルーザー-FS30)の種子塗沫処理の効果(第83号普及情報)